

暮らしの中の生きものたち

斑猫

このコーナーでは
身近でなじみ深い生きものたちを紹介しています

「みちおしえ」「みちしるべ」で親しまれている、た(?) ナミハンミョウが、京都府レッドデータブック2015では、なんと絶滅危惧種に指定されています。そこには、「2000年ごろまで都市近郊の平地や浅い山地で普通にみられたが、その後都市域の道路や平地の開発整備に伴って、個体数の減少とともに分布域が狭くなった」、「府内で本種が命脈を保っている産地の調査が必要である」と書かれていました。

平地から浅い山地にかけて広がる法然院の境内です。「法然院森の教室」で1988年に作成したポストカードのセットでは、群青色の地に青緑の粹線、朱色の帯、白い紋などのあるそのカラフルな姿が写し出されていました。夜は葉裏などで休むらしく、カエデの葉の上には寝に行くところだったのかもしれない。

陽の光を受けて輝きながら「みちをおしえ」られ、近づいてみると牙のように長い大アゴがあることに気づかされます。

ハンミョウは、英名の「タイガー・ビートル」の通り、地面を走り回ってアリなどの昆虫を狩る肉食昆虫なのです。成虫は死体に来ることもありますが、幼虫は完全な待ち伏せハンターで、細長い体を縦穴に隠しながら大小12個の眼を出して見張り、アリやバッタが近くを通ると、その瞬間、上半身を出して大アゴで捕え、穴にひっぱり込んで食べる！のです。けれども、待つばかりの狩りではエサが足らず、蛹化に至らないものも多く、おかあさんはそれを見込んで100個もの卵を産むといわれます。

産卵は初夏の頃。産卵管で地面に穴をあけ、一つの穴に一つずつ、卵を産みつけます。生まれた幼虫は3回脱皮をしながら越冬をして、その後、穴の口を塞いで蛹になり、夏に羽化しています。成虫は夏から秋に動き回り、冬が来ると石の下などで小集団で越冬して、初夏の産卵に臨みます。

山では、ニワハンミョウによく出会います。くすんだ暗い色で地味ですが、背中に薄黄色の斑点模様があります。しばし捕まえて、子どもたちと大きな眼と太いアゴの顔や、腹面のエメラルドグリーンの輝きを観察しました。

ニワハンミョウは2齢幼虫の頃、巣穴の口を塞いで「夏眠」することが調べられ、それは、小さい時代のハンミョウたちの天敵、ホソツヤアリバチから身を護るためではないかと推測されています。5ミリほどのアリに似たこのハチは、ハンミョウの巣穴を見つけると近づいてわざと捕まり、すばやくお尻の針を突き刺して麻酔をかけ、幼虫の腹に卵を産んで、巣穴から出ていきます。目覚めた幼虫は生きたまま、やがて生まれるホソツヤアリバチの幼虫のエサになるという天敵ぶりなのです。

さて、もともと「斑猫」とは、中国でツチハンミョウ科のキオビゲンセイを指す名前でした。成虫に黄色の帯状の斑があるからでしょう。その乾燥したものは25%ものカンタリジン(ツチハンミョウ、ジョウカイボン、カミキリモドキ、ハネカクシなどの体液に含まれる有毒物質)を含み、「猛毒」かつ「薬」として使われてきました。

江戸時代初期、中国から渡来した『本草綱目』に書かれていた「斑猫」を間違えてオサムシ科の「みちおしえ」にあててしまっ以来、日本では、ハンミョウの名が無毒のオサムシ科と有毒のツチハンミョウ科の両方で使われることとなりました。

クマバチの巣に寄生するヒラズゲンセイが、温暖化によって近畿地方を北上しているらしく、見られる季節は短いものの赤いクワガタのようだと思っるとかぶれることもあるため、注意が呼びかけられています。



ナミハンミョウ 2019.9.8

法然院の森にて
環境に大規模な変化はなく今も健在



ポストカード「ハンミョウ」



ニワハンミョウ 尾根の森にて
上から背中 2015.5.10
顔、腹面 2019.4.21

- 日本にいる主なオサムシ科ハンミョウ亜科の昆虫
ナミハンミョウ、コハンミョウ、ミヤマハンミョウ
ニワハンミョウ、コニワハンミョウ、ホソハンミョウ等
- 日本にいる主なツチハンミョウ科の昆虫
ツチハンミョウ亜科
ヒメツチハンミョウ(ハナバチ類の巣に寄生)
マメハンミョウ(バッタ・イナゴの卵塊に寄生)
- ゲンセイ亜科
キイロゲンセイ(ハナバチ類の巣に寄生)
ヒラズゲンセイ(クマバチの巣に寄生)